

Chapter 2

女性アスリート 強化プログラム

プログラム概要

背景と目的

女性アスリートは、国内における国際レベルの競技大会が少なく、ハイレベルな競い合いの機会も少ないことから、アスリートのトランジションやブレイクスルーといった、パフォーマンスレベルを向上させる機会が限られているという現状にあります。

それらを踏まえ、本事業では女性アスリートに対する支援の充実を図るため、「女性アスリートのための競技大会」をプログラムの中核的なコンテンツにし、戦略的かつ実践的な強化プログラムを実施しました。

国内における主要大会の男女別種目数
(JSC調べ、2017)

競技種目数	女性	男性
全中大会(中体連)	16	17
国体(岩手)少年B種目	24	32
国体(岩手)少年A種目(日体協)	32	35
インターハイ(高体連)	27	32
選抜(高体連)	32	32
インカレ	50	49
国体(岩手)成年種目(日体協)	37	39
合計	218	236

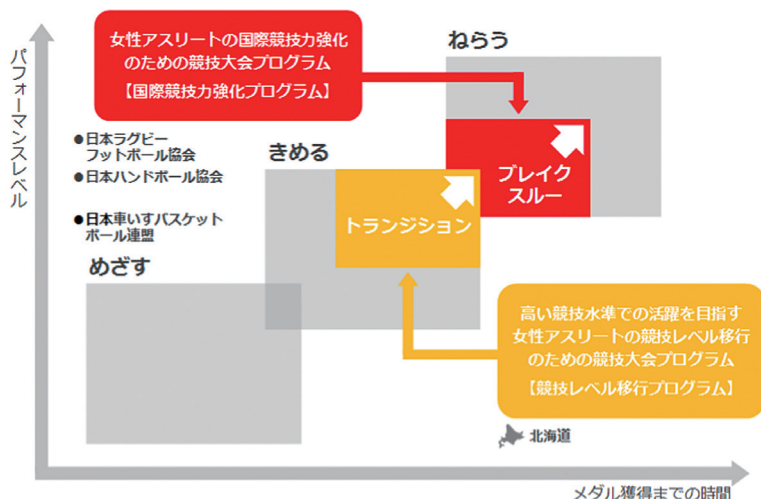


プログラムの策定・実施

プログラム実施にあたり、女性アスリートが国際レベルでの大会経験を契機にしてパフォーマンスを向上させていくこと、また、その大会がアスリート育成パスウェイと連携し、強化戦略に資することを目指し、以下の事業フレームをもとに「国際競技力強化プログラム」「競技レベル移行プログラム」を策定しました。

「国際競技力強化プログラム」は、ナショナルレベルの女性アスリートが国際競技大会の経験を積むことで、女性アスリートとしてのブレイクスルーを生み出すことを目的とし、NFへ再委託しました。

「競技レベル移行プログラム」は、ナショナルレベルの下の方層で高い競技レベルを有する女性アスリートが、競技大会を通じてさらに高い競技レベル（ナショナルレベル）へ到達するためのパスウェイを創出することを目的とし、地方公共団体へ再委託しました。



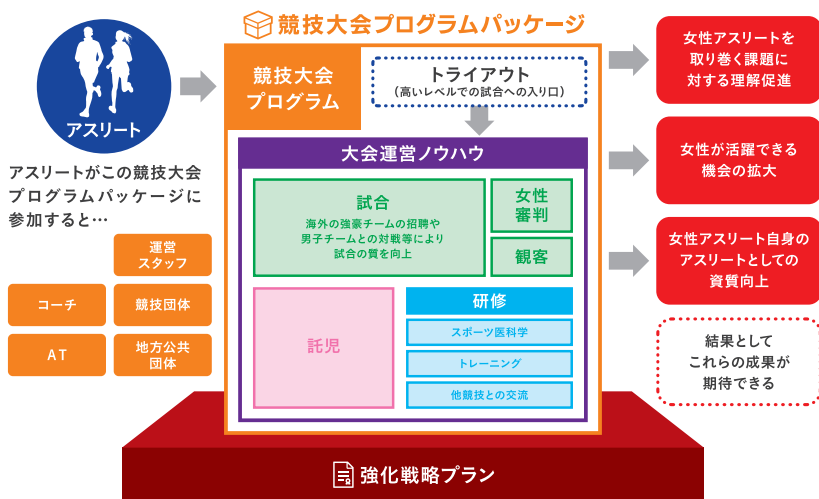
また、パラリンピック競技においては、「**パラリンピック競技における女性アスリート強化のための競技大会プログラム**」を策定しました。「パラリンピックにおける女性アスリート強化のための競技大会プログラム」では、運営体制が構築されている競技団体、かつ海外からアスリートを招聘し大会を運営するノウハウを持っているNFと連携し、JSCが主体となり実施したプログラムです。



策定したプログラムの概要

モデルプログラム名	対象	構造
国際競技力強化プログラム (女性アスリートの国際競技力強化のための競技大会プログラム)	中央競技団体の強化プログラムの対象となっているアスリート層	国際競技大会の機会を創出することで、国際競技力を向上させ、アスリートとしてのプレイクスルーを生み出す。
競技レベル移行プログラム (高い競技水準での活躍を目指す女性アスリートの競技レベル移行のための競技大会プログラム)	中央競技団体の育成プログラムの対象となっているアスリート層	年齢やパフォーマンスレベルに応じた競技大会の機会を増やすことで、アスリートパスウェイを創出する。
パラリンピック競技における女性アスリート強化のための競技大会プログラム	①競技団体に登録されている女子アスリート及び指導者 ②女子アスリートの保護者及び介助者	アスリートだけでなく、指導者や保護者などの関係者を取り込むことで、包括的な競技力強化の仕組みを創出する。

競技大会プログラムのパッケージ化



本プログラムでは、女性アスリートに特化した国際的な競技大会を実施することで、国際競技力の強化を図るとともに、女性アスリートを取り巻く課題に対する情報提供や教育プログラムが一体となった包括的な新たな競技大会プログラムを開発しました。

日本ラグビーフットボール協会、日本ハンドボール協会、日本車いすバスケットボール連盟、北海道に対し本プログラムにおける競技大会プログラムをひとつのパッケージとして、展開し実施しました。

プログラムの実施内容

再委託事業①北海道

北海道では、ウィメンズセブンズシリーズのコアチームより8チームを選定し、代表チーム入りを目指すレベルかつ大会機会の少ない高校生から大学生のアスリートを対象に実施しました。海外からは同等レベルのチームを招聘し、競技大会を実施しました。

北海道知事杯 2016女子セブンズラグビートーナメント



【期間】

2016年9月22日～24日

【参加】

南アフリカ、オーストラリア、
ニュージーランドより4チーム、
日本（8チーム）

北海道知事杯 2017女子セブンズラグビートーナメント



【期間】

2017年9月8日～10日

【参加国】

南アフリカ、オーストラリア、
ニュージーランド、カナダ、日本
（8チーム）

主 催：北海道

場 所：北海道バーバリアンズ 定山溪グラウンド

背景・課題

アスリートの育成支援については、各都道府県において才能のあるアスリートをスムーズにNFの強化レベルへ引き上げる「タレント発掘・育成事業」を実施しています。しかし、女性アスリートに特化した発掘・育成は取り組まれておらず、競技レベル移行が課題である若年層の女性アスリートに対して地方自治体が行き届くことが出来るモデルプログラムが必要であると考えられます。

目的

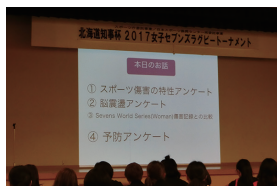
上記の課題を踏まえ、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、対象とする競技種目を女子7人制ラグビーとし、優れた素質を有する次世代を担う女性アスリートを組織的かつ計画的に育成するため、国際的な強化試合を実施することでアスリートの強化及び育成システムの構築を図ることを目的にプログラムを実施しました。

仮説

国際強化試合が実施されることにより、将来、日本代表を目指す若年層の女性アスリートの競技機会を確保できると考えられます。女子7人制ラグビーにおけるNFと地域競技団体、地域クラブとの連携が強化され、地域のクラブから日本代表へのパスウェイモデルの構築を図ることができると考えられます。また、参加したアスリートや指導者が地域や海外と交流することにより、ラグビーに対する意識の変容が期待できます。

実施プログラム

◆教育プログラム・開会式ウェルカムパーティー



事前アンケートで抽出された課題に沿って、ラグビーをする女性アスリートに向けた教育プログラムを実施



パワーリフティング競技でパラリンピック出場を目指す戸田雄也(とだまさや)氏の講話



開会式・ウェルカムパーティーの様子



ウェルカムパーティーでは各チームがパフォーマンスを披露し、交流がなされた

教育プログラムに関する選手の感想

これまで参加したセミナーは、男子トップリーグのデータが多かったですが、今回は私たちに事前アンケートを取って、その結果を元に話していただき、自分たちの現状を知ることができました。どれだけトレーニングしても、怪我で試合に出場できないことが多く、そうならないためにどのように予防すべきかということを学びました。



試合に向けた選手のコメント

11月から始まるワールドシリーズに向けて、今回海外チームと試合させてもらえるのはとても嬉しいことです。体格など大きい相手ですが、ひるむことなく日本代表の力を見せつけたいです。





女性レフリーも活躍



カナダ対日本選抜による決勝戦の様子

女性レフリーの感想

海外から4チーム、国内から8チームが参加し、選手だけでなくレフリーにとっても良い機会でした。



今大会に参加した女性コーチの感想

ラグビーは今、裾野が広がって女性選手が増えてきています。今回のような形で大会が増えていければ、国内で経験が積めることができて、世界に出たときにその経験が役に立つと思います。



◆地域との連携

大会運営は地域クラブと連携し、実施しました。試合後は、地元の食材を使ったバーベキューと共に、アフターマッチファンクションが行なわれました。



海外研修プログラム(ニュージーランド・ワイカト)

大会を通じて将来性が見込まれたアスリート（タックル、パスなど特定の技術に優れた者）及び派遣希望の意思を持つアスリートを選考し、派遣しました。海外研修を通じて最先端の技術に触れることで、国際競技力の向上を図るとともに、現地での生活を通じて国際感覚を豊かにする機会を提供しました。



トレーニングの様子



現地の様子



出発前：地方のアスリートや遠征の多いアスリートに配慮し、羽田空港にて、JISSと連携した教育プログラムを実施しました

【派遣期間】 2016年10月24日～11月20日

【派遣アスリート】 5名

月曜日…トレーニング

火曜日…トレーニング

水曜日…トレーニング

木曜日…トレーニング

金曜日…トレーニング／文化・教育プログラム

土曜日…試合観戦または試合

日曜日…オフ

参加したアスリートの感想

研修を通して、ラグビーの基礎を学び、楽しさを改めて実感し、周りのサポートがあったことをとても幸せに感じます。特に試合を通じて学んだこと、練習を通して感じたこと、また自分の弱いところも改めてわかり、本当に良い3週間を過ごすことができました。

再委託事業②日本ラグビーフットボール協会

日本ラグビーフットボール協会では、女子セブンス日本代表候補の選手を対象に、海外のナショナルもしくはアンダーカテゴリーのチームを招聘し、沖縄県残波岬ボールパークにて競技大会を実施しました。

沖縄セブンス2017



【期間】

2017年2月18日～19日

【参加国】

オーストラリア、フランス、オランダ、日本選抜2チーム

沖縄セブンス2018



Photo by inamine

【期間】

2018年2月22日～25日

【参加国】

アメリカ、オーストラリア、カナダ、フィジー、ロシア、イングランド、日本選抜2チーム

主 催：公益財団法人日本ラグビーフットボール協会
場 所：残波岬ボールパーク

背景・課題

2016年リオデジャネイロオリンピックより、男女の7人制ラグビーが正式種目として採用され、女子7人制ラグビー競技の日本代表の出場をきっかけに、日本国内における女子ラグビーの競技者数は増加傾向にあります。

しかしながら、まだ競技人口は不足しており、女性アスリートを取り巻く環境において、プレー環境不備、指導者不足、強化合宿の環境確保難、強化費不足などの課題があります。また、これらの課題に加え、アスリート、指導者、レフリー、大会運営等において、国際経験も含む高いレベルの大会経験不足も課題となっています。女性アスリート自身の課題としては、下記の図表のように、スキルレベルにおいて世界レベルと国内レベルの差は明確で、アスリート自身の競技力向上により差を縮めていくことが必要となっています。

世界との比較
(出典：日本ラグビーフットボール協会)

レベル	スキルレベル (競技面での目標値)	メンタル要素	女性特有の課題
世界レベル World Series	・タックル成功率80% ・高いプレッシャー下での精度 ・高いプレッシャー下での判断力 ・自身の強みを出すことができる	・ Role Model ・ 言動、自己管理 ・ 度胸・大胆さ ・ 高い集中力	・ グルーピングがある ・ 公平性の要求 ・ 婦人科系の疾患 ・ コンタクトによる怪我のリスクの高さ
国内レベル ウィメンズセブンズ	・ タックル成功率60% ・ 高いプレッシャー下での精度 ・ 戦術/システムの理解	・ 代表を目指す意志 ・ 自己の理解と内省 ・ タフさ（環境への適応）	・ グルーピングがある ・ 婦人科系の疾患 ・ コンタクトによる怪我のリスクの高さ

目的

国内女子ラグビーにおける現状と課題を打開し、図表の目標値を確実に達成していくため、恒常的な国際競技力向上に寄与できる女性アスリートの育成・支援を目的とした競技大会プログラムを開催しました。

仮説

限られたアスリートを対象としていた強化・育成プログラムを、より広いアスリートに機会提供を行うことで、国際試合の経験による国際競技力の向上、トライアウトの実施機会の増加による新たな有望アスリートの発掘、指導者のレベル向上、2020年東京オリンピック競技大会への意識向上を図ります。



日本対オランダ戦の様子 Photo by inamine



フランス戦の様子 Photo by inamine

実施プログラム

◆選手発掘トライアウト



トライアウトで発掘された選手 Photo by inamine

国際大会の実施の他、新たな有望アスリート発掘のためのトライアウトを実施しました。発掘されたアスリートは沖縄セブンズ大会に帯同したことで、世界で戦うための自身の課題把握をすることができました。

トライアウトを実施したことで、プログラム内でのアスリートパスウェイを構築することができました。

◆パラリンピック競技との連携

2016年リオデジャネイロパラリンピックにコーチとして帯同した三阪洋行（みさかひろゆき）氏の講話や、ウィルチェアラグビー体験を実施しました。



三阪氏による講話「メダル獲得への道のり」



ウィルチェアラグビー体験

試合後のアスリートの声

ワールドシリーズにフル代表で出ているアスリートもたくさんいるレベルの高い中でラグビーができ、学ぶことがたくさんありました。そのような人たちと試合をすることで自分がどうすれば良いのか、何が通用するのか、たくさん考えることもできました。まだまだ足りないことだらけですが、世界で戦えるアスリートになりたいです。

◆女性が活躍する大会



ワールドラグビーから女性のトップレフリーを招聘したり、女性コーチや、アスリートが活躍する大会となりました

◆地域との連携



地域のボランティアを活用して競技大会を運営しました

◆バスウェイの高度化



北海道のプログラムに参加した選手が、日本代表候補に選手され、大会バスウェイが構築されました

再委託事業③日本ハンドボール協会

日本ハンドボール協会では、平成28年度はU-22カテゴリーを対象に、カザフスタンのナショナルチームを招聘し、熊本県アクアドームくまもとにて競技大会を実施しました。

平成29年度は2020年東京オリンピック競技大会を目指すターゲット世代を対象に、ポーランドとアンゴラのナショナルチームを招聘し、熊本県で事前合宿及び教育プログラム実施後、大分県立総合体育館にて競技大会を実施しました。

ヤングおりひめトライアルゲームズ



【期間】

2017年2月24日～27日

【開催地】

熊本県 アクアドームくまもと

【参加国】

カザフスタン、日本

おりひめトライアルゲームズ



【期間】

2017年8月7日～14日

【開催地】

熊本県 オムロン鹿陽センター
大分県立総合体育館

【参加国】

ポーランド、アンゴラ、日本

主 催：公益財団法人日本ハンドボール協会

背景・課題

ハンドボールにおいては、世界の多くの女性トップアスリートが集まり、プロリーグや世界大会が多く開催されている欧州と比べ、日本の女性アスリートは、早期から世界トップレベルを経験できる機会が少ないという課題があります。また、欧州のプロリーグにおいては、若いアスリートがジュニアチームとトップチームを掛け持つことで、早期から高いレベルに身をおき、実践機会が確保できる環境が確立されています。

日本国内においては、全国登録チーム数において、女性は男性の40パーセントにとどまり、国内のトップレベルである日本リーグでさえも、女子チームはわずか7チームで実施されているなど、全国的に女性アスリートの競技機会が確保されていません。

また、世界選手権上位7カ国の平均身長が176cmであるのに比べ、日本代表は166cmです。形態的不利を活用し、世界と戦える技術、戦術、フィットネスの向上を図るためには、アスリートのみならず、強化スタッフ、指導者などの周辺環境を含めた課題として、包括的な取り組みとして捉え、解決する必要があります。

目的

女性アスリートに対し、高いレベルでの競技経験の機会を創出することで、アスリートだけでなく周辺の強化環境（指導者、関係者、組織等）の整備、向上、さらには女性アスリート強化のための新たな方策の確立につなげ「世界トップゾーン」への進出を含めた国際競技力向上に貢献することを目的に、プログラムを実施しました。



仮説

今後、日本代表がトップゾーンへのレベルアップを目指す上で、ジュニア期からシニア期に至る過程での高いレベルでの経験値の向上は、大きな課題となっています。

そこで本プログラムでは、国際レベルでの経験の少ない女性アスリートに対し、世界トップレベルでの実践機会とアスリート個々の資質向上のための教育の機会を創出するとともに、強化関係者への視点、意識の変化を促す取り組みを含めた、包括的なプログラムを実施することで、ハンドボールの女性アスリートにおける課題の解決を図りました。

実施プログラム

◆教育プログラム

女性アスリートを対象とした月経やコンディショニングなど、女性アスリートのスポーツ医・科学に関する講義の他、国際ハンドボール連盟より招聘した講師による大会運営カンファレンス等を実施しました。



女性アスリートのスポーツ医・科学に関する講義



試合会場の設営状況に即した、大会運営カンファレンスを実施

女性に特化した競技大会について

2019年の世界選手権、2020年の東京オリンピック競技大会に向けて、国際基準で大会を実施することの意義は大いにあります。また、男性の試合、女性の試合、どちらも重要ですが、女性の力によって大会が運営されることはとても意義があることだと感じてます。

(国際ハンドボール連盟 モニカ・ハーゲン氏)



女性の国際レフリーをロシアより招聘



日本対アンゴラ戦の様子

本プログラムに対する男性チームスタッフのコメント

世界の強豪国を迎え、女性に特化した大会を実施する機会は貴重でした。2019年、2020年を目指すにあたり、この世代の選手が国際試合の経験を積む機会が大事になってきます。

世界のトップチームと試合をすることで、世界と戦う上で日本に何が足りないのか様々な角度から見ることができ、選手に対しどのような教育プログラムを展開したらどんなレスポンスが得られるのか、という点でも課題が抽出できました。これらの課題を、強化の過程で日々の活動に落とし込みたいです。



東京2020大会に向けたアスリートのコメント

海外チームとの試合を多く経験して、それを活かして2020年までにフィジカル面など強化し、試合毎に1回1回かためられるようなチームにしたいです。



JSC本部事業プログラム内容

車いすバスケットボール

パラリンピック競技においては、オリンピック競技と比較して国際競技力強化に特化した競技大会の機会が非常に限られています。一定の条件をクリアした（運営体制が構築されている、かつ海外からアスリートを招聘し大会を運営するノウハウを持っている）NFである車いすバスケットボールを対象に、JSCが主体となって事業を実施しました。



男子アスリート

- 連盟登録者数:589名
- 登録チーム数:62チーム



女子アスリート

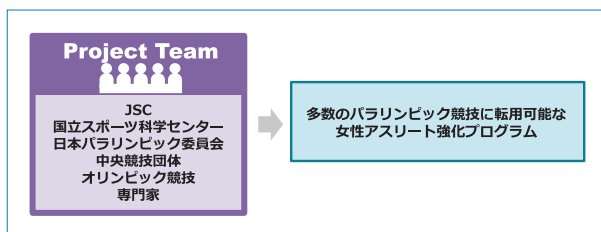
- 連盟登録者数:72名
- 登録チーム数:8チーム

※2017年6月時点の情報です。

車いすバスケットボールにおいて、女性チームは8チームのみです。そのため、女性アスリートは国内での競技機会も少なく、男女間での競技機会の差が生じています。

「女子チームが少ないため、試合機会が少ない」「居住地の近くに女子チームがない」「男子チームに所属しているため、試合に出られない大会などがある」といった課題や現状があることを女性アスリートから伺いました。

プログラムの実施にあたり、多数のパラリンピック競技に転用可能な大会プログラムを策定することを目的に、「パラリンピック競技（車いすバスケットボール）における女性アスリート強化のための競技大会プロジェクト」としてプロジェクトチームを編成し、実施しました。



競技大会実施までの経緯

① アスリートの選定

NFとの話し合いの上、強化指定選手及び育成選手をあわせて21名を本プログラムの対象アスリートとしました。

アスリートの選定にあたり、以下の条件をもとにNFで参加の募集及び選定を行いました。

- » 競技団体に登録している者
- » 高い目標をもって参加できる者
- » チームの推薦を受けている者

② 開催地の選定

NFが、過去に合宿等で利用した体育館の空き状況を確認し、男子の強化合宿で利用した実績のある焼津市総合体育館を利用しました。



③ 招聘国の選定

NFとネットワークが構築されている国にオファーを出し、カナダの車いすバスケットボールアカデミーチームを招聘しました。



④ 業務委託

1) 選手の会場までの移動や宿泊地の手配を含めた以下の業務を旅行代理店に委託しました。

- ✓ 宿泊地及び宿泊地から会場までのバスの手配
- ✓ 昼食（弁当）、夕食（ケータリング）の手配
- ✓ カナダチームのアテンド業務
- ✓ カナダチームの航空券手配
- ✓ 日本チームの国内交通機関の手配 等

2) イベント託児の業者に業務委託しました。

3) 通訳業者に業務委託しました（プログラムのディスカッション部分のみ）。

【ホテル選定の注意事項】

車いすを使用するため、以下の条件でホテルを手配しました。

- 車椅子でアクセスできるトイレ、浴室などがそれぞれの宿泊部屋にあること。段差がある場合は、15cm以下とすること。また、宿泊施設にユニバーサルルームがある場合、複数用意し、浴室、トイレが共有できるようにすること。
- 部屋の種類はツインを2名使用とし、20～25平方メートル以上あること。シングルの場合、15～20平方メートル以上の広さがあること。

⑤ 会議やミーティングの実施

4回に渡るプロジェクト会議や、NFや体育館との個別ミーティングを実施しました。

⑥ 競技大会の実施

日時:2017年12月11日～12月16日

場所:焼津市総合体育館

実施プログラム

- Day. 1
- ・オリエンテーション
 - ・身体測定（体組成、血中ヘモグロビン値）
 - ・女性アスリートリテラシーアンケート
 - ・栄養、コンディショニング、月経に関する教育プログラム



体脂肪率やヘモグロビン値の測定を行いました



栄養や月経に関する教育プログラムを、測定の内容とリンクさせて実施しました

- Day. 2
- ・日本チームとカナダチームの合同体力測定
 - ・身体測定、女性アスリートリテラシーアンケート(カナダ)
 - ・スキルクリニック(日本)
 - ・練習試合



合同で体力測定をすることで、日本とカナダの比較を数値だけでなく実感することができました



元オリンピックによるスキルクリニックを実施しました

Day. 3 ・チーム練習
 ・練習試合
 ・日本チームとカナダチームの交流会、ディスカッション



アスリートのグループでは、親睦を深めることを目的に、競技を始めたきっかけや、練習環境についての交流会を行いました



スタッフのグループでは、「車いす女子選手のアスリートパスイの構築」をテーマに、両国の情報交換を行いました

Day. 4 ・チーム練習
 ・練習試合



午前中はチームでの練習、午後に練習試合をすることで、練習でインプットしたことをすぐに実践できる場を設定しました



プログラム期間中、昼食はお弁当、夕食はケータリングを手配しました

Day. 5 ・チーム練習 ・国際フレンドリーマッチ



約100名の観客が来場し、国際フレンドリーマッチを開催しました



試合開始



試合の様子



試合終了後、観客と選手のハイタッチ交流を実施しました

Day. 6 ・総括

本事業の総括として、アスリートやスタッフにプログラムの感想や、自身が成長できた点などについて、発表する場を設けました。

選手からは、貴重な経験をすることができた、世界とのレベルの差を実感したという感想を得ました。



総括の様子

託児サービスの実施

託児サービスを導入することで、子供のいるアスリートが参加しやすい環境を整備しました。



託児を利用したアスリートのコメント

託児がなければ、参加を諦めていた。このようなサポートを受けて、もっと高みを目指そうと思いました。また、仲間から「自分が出産した時、競技と育児の両立を頑張ろうと思った」と言ってもらい、他の選手にも良い影響を与えられたことが嬉しかったです。



参加者の声

国際大会の機会がなかった選手に対し、機会を創出することができました。



選手

初めての海外チームとの試合で、自分のできないところがわかった以上に、自分にできることがわかったのが良かったです。もっと頑張って良いところを活かせるようにしたいと思いました。



選手

普段は練習から試合までの時間が長く、練習で上手くできていても試合でそれを発揮できないことが多いです。試合中にフォーカスすることがわかったし、練習でしっかり取り組むことができました。カナダの選手がコートの中だけでなく、コートの外でどのように過ごしているのかが肌で感じることもできたのも良かったです。



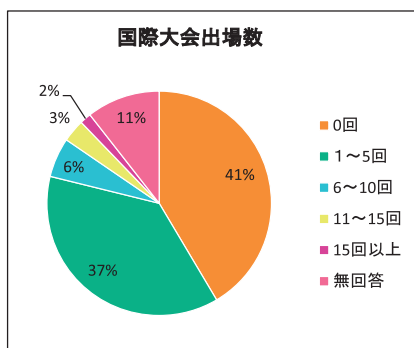
コーチ

代表になる前の選手がこのようなプログラムに参加することは、とても意義のあることでした。カナダと対戦を繰り返す中でいろんなことを学ぶ機会を得られたことは、良い刺激になったと思います。

女性アスリート強化プログラムの成果

プログラムを実施した4団体における共通の成果は主に3つあります。

(1) 国際競技大会の機会と女性活躍の機会を創出



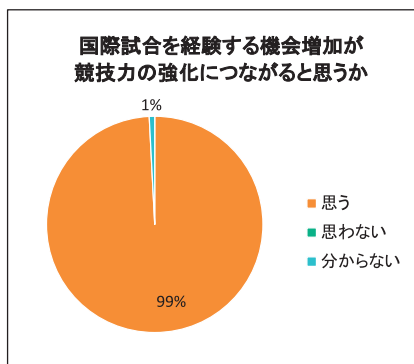
① 国際競技大会の機会創出

国際的な環境での競技機会が少ない階層の女性アスリートに対し、国際競技大会に触れる機会を創出しました。

本プログラムに参加した女性アスリート123名に対するアンケートによると、約4割のアスリートが、国際大会の経験がありませんでした。また、国際大会の経験があるアスリートでも、1回～5回の出場経験が全体の約4割であったことから、本プログラムの参加者の多くが、国際大会の機会や経験が少ないことがうかがえます。

そのような国際大会の機会が少ない女性アスリートに対して、国際競技大会に参加する機会を創出することができました。

また、99%の女性アスリートが、「国際試合を経験する機会増加が競技力の強化につながると思う」と回答しています。この結果から、本プログラムの有効性及び、国際大会の競技機会の重要性が明らかになったといえます。



② 女性が活躍できる機会創出

競技大会を通じて、女性アスリートという枠組みに留まらず、女性が活躍できる機会が拡大しました。各NFにおいて、女性レフリーの起用や大会運営を女性中心で行なうなど、様々な取り組みや工夫がされました。

競技団体	取組み
日本ラグビーフットボール協会	●女性レフリーの起用
日本ハンドボール協会	●女性レフリーの起用 ●大会運営スタッフに女性を多く配置
北海道	●女性レフリーの起用
日本車いすバスケットボール連盟	●女性ヘッドコーチの活躍 ●女性チームスタッフや女子委員会の協力 ●女性レフリーの起用

女性レフリーのコメント



いつか男性や女性という言葉で仕事を語らない日が来て欲しいです。私はピッチの上では自分のことを女性だと思っていません。レフリーです。男性の試合でレフリーをすることもあります。私は男性の選手からレフリーとしてリスペクトされています。レフリーとしてのパフォーマンスに集中すれば、パフォーマンスの良さには男女の違いはないと考えています。しかしながら、リスペクトされるパフォーマンスを磨くには、機会が不可欠です。

女性運営スタッフのコメント

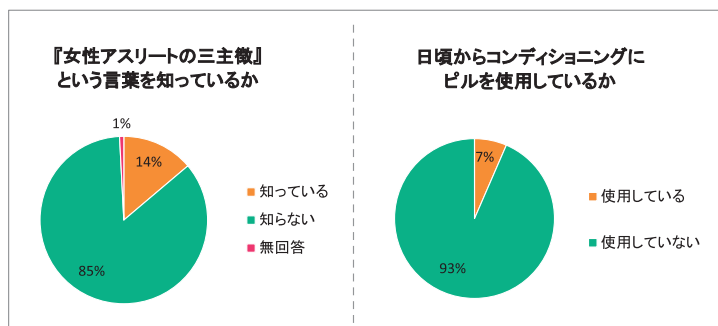
女性の大会は女性で運営するという視点で、国内で統一した見解の中で競技大会を実施することで、アスリートも安心して競技ができ、女性スタッフの発掘や育成にもつながると思います。また、女性アスリートだけでなく、スタッフも利用できる託児サービスも必要だと感じました。



(2) アスリートや指導者を含む競技関係者の意識変化

競技大会期間中に、女性アスリート特有のスポーツ医・科学に関する情報提供をすることで、アスリート及び指導者を含む競技関係者に意識の変化を起こすことができました。

本プログラムに参加した女性アスリートの多くが、「女性アスリートの三主徴」や「ピル使用によるコンディショニング」についての知識がありませんでした。情報提供したことで、月経時の悩みの解決法が分かったので実践したいという意見を多く得ました。



男性スタッフのコメント

女性特有の身体の問題は、男性は介入しにくいです。このような講義を通じて、選手だけでなくスタッフの知識が向上することで、選手たちの状況がどう変化しているのか知ることができ、競技力向上につながるのではないかと感じました。



ピル使用に関するアスリートのコメント

女性アスリートに特化したコンディショニングなど普段聞けないような話が聞けてよかったです。以前、ピルを使用したらどうかと病院で勧められたことがあり、今回の話を聞いて、競技力の向上のために使用してみようと思いました。

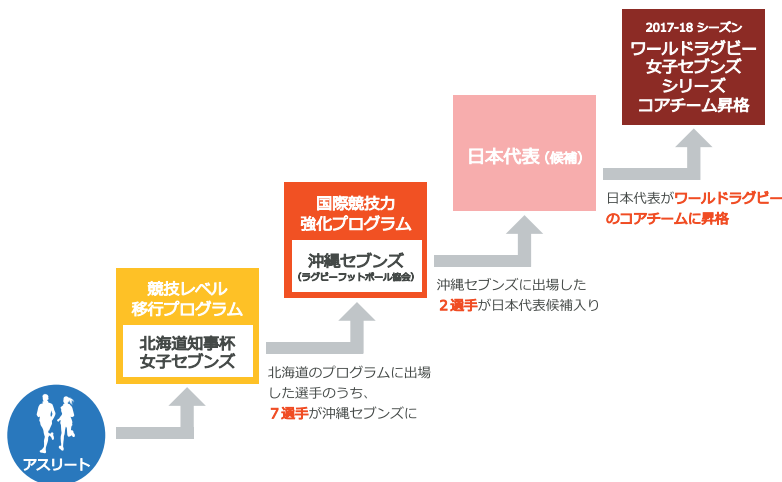


(3) アスリートの「大会パスウェイ」の仕組みを構築

日本ラグビーフットボール協会、北海道の2団体に共通した競技の7人制ラグビーにおいて、アスリートの大会パスウェイの仕組みが構築されました。

北海道のプログラムに出場したアスリートのうち7名のアスリートが、沖縄セブンズの選抜メンバーに選出されました。さらに、沖縄セブンズに出場した2名のアスリートが、日本代表候補に選出されました。また、日本代表チームは、ワールドラグビー女子セブンズシリーズのコアチームへの昇格を果たしました。

大会パスウェイの構築



このような大会パスウェイを構築するためには、目指すべき競技大会に向けたマイルストーンとして、国際試合の機会が強化戦略としてデザインされていることが重要です。

